二〇二五年度A

小論文（60分）

〈注意〉

一、開始のチャイムが鳴るまで、この冊子を開いてはいけません。

二、小論文用紙は、2枚配布されます。どちらか1枚を提出しなさい。

三、提出する小論文用紙の所定欄に、受験番号と氏名を記入しなさい。

四、提出する小論文用紙の冒頭にある所定欄に、○印を付けなさい。

受験番号

【問】 傍線部「子どもの『論破』も悪くない」とありますが、どういうことですか。本文の内容を踏まえて説明してください。

また、筆者の主張に対するあなたの考えを述べてください。なお、字数は六〇〇字とします。

【時間六〇分】

先日、小学生のお子さんを持つ知人と話をする機会があった。あれこれ話をしていると、面白いことを聞いた。お子さんの通う小学校で、「それってあなたの感想ですよね」という言い回しが流行(はや)っているというのだ。

親や教師が何か言うと、「それってあなたの感想ですよね」と言い返してくる。そんな子どもに手を焼くという話は、以前からインターネットでも時折目にしていたのだが、意外と身近なところにその実例があると知って、驚いた。

相手を言い負かす、あるいは言い負かしたことにすることを、最近ではよく「論破」と言っている。「論破」する子どもをめぐっては、「この子たちは一体どうなるのだろう」と嘆く向きもあるかもしれない。けれども、私自身はむしろ、これを健全なことだと思っている。なぜなら、子どもたち（というか私たち）は昔から、相手を黙らせるための決まり文句を使ってきたからだ。

最も広く使われているものの一つは、「何時何分何秒、地球が何回まわったとき?」だろう。「約束したじゃん」などと言われても、こう切り返して反故(ほご)にする。子どもの口喧嘩(くちげんか)で見る定番フレーズだ。

私の小学校には、「あっそ、だから、で、なにが言いたいの?」という言い回しがあった。何か言われると、このフレーズをリズムに乗って繰り返す。思い出すだけで恥ずかしくなる光景だが、おそらく令和の小学生たちも、「それってあなたの感想ですよね」を一抹の羞恥心とともに思い出すことになるのではないか。

ところで、「論破」する子どもの存在は、逆に、大人はそうそう「論破」しないという事実を浮かび上がらせる。大人の感覚が子どものそれとズレているからこそ、「論破」する子どもが心配になる。では、大人がそれほど「論破」しないのはなぜだろう。

このことを考える上で、すこぶる示唆に富むのが、「ひろゆきの論破くん」という商品だ。スピーカーと16個のボタンが付いた装置で、ボタンを押すと、「それってあなたの感想ですよね？」とか「なんかそういうデータあるんですか？」といったフレーズが再生される（らしい）。

唸らされたのは、その商品紹介である。そこには、「ボタンを押すだけで、ひろゆきがあなたの代わりに論破してくれる音声ボタンです。ちょっと言いづらいことも、これなら面白く切り返せるかも?!」とある。

この説明文は、「論破」の一面をうまく言い当てていると思う。相手を「論破」するようなセリフは、「ちょっと言いづらい」のである。

コミュニケーションには、年齢や地位からくる上下関係や、親しい間柄での友好関係の負荷がかかっている。関係をうまく築くには、最低限の礼儀が求められる。そのため、相手の意見を論駁することが簡単でない場面も多い。

上司の発言を果敢に論駁しようと思っても、時と場合を間違うと、「つべこべ言うな」とか「黙って言うことを聞け」と言われて終わってしまう可能性があるし、友人の発言を必要以上に問い詰めると仲違いするかもしれない。そうした場面では、仮に相手を論駁するにしても、かなり言葉を選び、顔色を窺うことになる。

裏を返せば、こうした負荷から自由な空間においてこそ、「論破」が現れやすい。例えば、インターネットは社会関係の負荷が低い空間を作り出した。年齢や地位が上の人であっても、直接的な付き合いはないために、意見を否定して差し支えない。だから、社会関係の負荷がかかっていたら生まれないはずの「論破」が、ネット上では容易く発生する。

そう考えると、「それってあなたの感想ですよね？」というフレーズが、他ならぬ子どもたちの間で流行するのも頷ける。大人を縛っている礼儀をまだ十分には内面化していないからこそ、子どもたちは気兼ねなく「論破」できる。

そもそも「論破」が問題視されるのは、それが本当の意味での論駁になっていないという感覚があるからだ。本人は論駁しているつもりでも、的外れで説得力がない。しかも、そういうケースに限って、「完全論破」を謳っていたりする。

理屈が通っていない議論を論駁したり、「エビデンス」を求めること自体は、なんらおかしいことではないし、むしろ必要だろう。例えば、商品開発の会議で侃々諤々の議論をするのは当然だし、そこで「何かデータあるの？」と聞くことも重要だ。

他方で、数値に表れにくい現実の襞を捉えるには、個人の多様な「感想」が欠かせない。お客様アンケートの自由回答欄のように、「感想」もまた重要な「データ」になるからだ。どんな立場の人にどう見えているのかということ自体が、豊かな情報を含んでいる。

その意味で、実は「感想」と「データ」が対立するわけでもない。「それってあなたの感想ですよね？」というフレーズに違和感を覚えてしまうのは、そのことを捨象してしまうためだろう。

とはいえ、「論破」なる現象をそこまで悲観する必要はないと思う。少なくともそれは、議論で決着をつけようとする人々の存在を示しているし、そもそも「論破」が問題になること自体、良い論駁と悪い論駁を見分けようとする姿勢が広がっていることの表れとも言える。

「それってあなたの感想ですよね？」と問いかける子どもたちは、早晩このフレーズを卒業し、もっとうまく議論できるようになるのだろう。その意味では、私の子ども時代なんかより、ずっと良いスタート地点にいるようにも見える。だとすると、子どもの「論破」も悪くない。そんなことを思ったりしている。

【出典】松村一志「『論破』する子どもたち」『群像』（二〇二四年四月）四一八～四一九ページ